

日中両言語における場面描写について

—話題と陳述に関するアンケート調査に基づいて—

1. はじめに

本研究では、場面を描写する場合、話者の話題設定及び陳述の仕方についてアンケート調査を行った。アンケートは日本語と中国語との二種類を用意し、見た画像を母語で説明するようにと要求した。問題用紙は次のようになる。

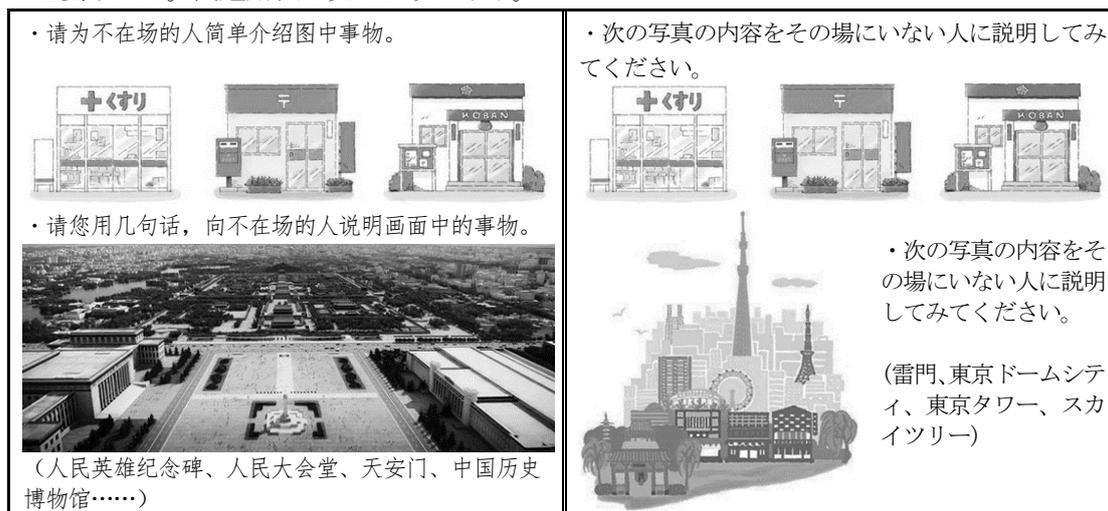


図1 中国語の問題用紙

図2 日本語の問題用紙

被験者は、初級中国語の授業を履修した日本語母語話者 51 名（関東出身の大学生で、書面提出）、初級或いは中級の日本語を履修した中国語母語話者 55 名（中国人大学生を中心に、ネット配布）計 106 名である。何も書いていない問題用紙などを除いて、集められた例文は（短文も含めて）述べ 212 例ある。

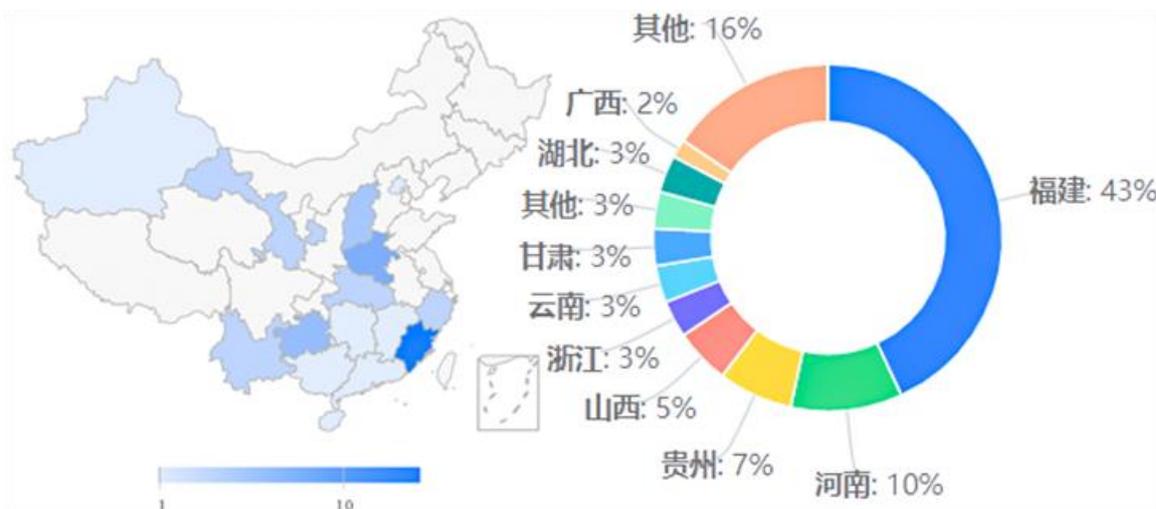


図3 中国人被験者の地域分布

アンケートの第一問は同じ画像を提示した。観察対象（客体）はリアル世界に位置付けることができない状況であるので、「未知な場面」とする。第二問は日中両国の被験者にとって、馴染みのある場所（リアルな世界に特定できる事物）を選んで、いずれも話者（観察の主体）の記憶（知識や経験）を呼び起こすことができるため、「既知な場面」とする。

調査の結果は以下の通りである。

2. 話題設定

日中両言語の発話者にはそれぞれ好まれる「重点の据え方」があるようである。本稿は 212 例に取り上げられた話題を「位置関係」、「知識や経験」、「様子や状態」のように分けて、さらに「未知」、「既知」のように項目ごとにまとめてサンプルを整理・統計した。

表 1 話題の設定

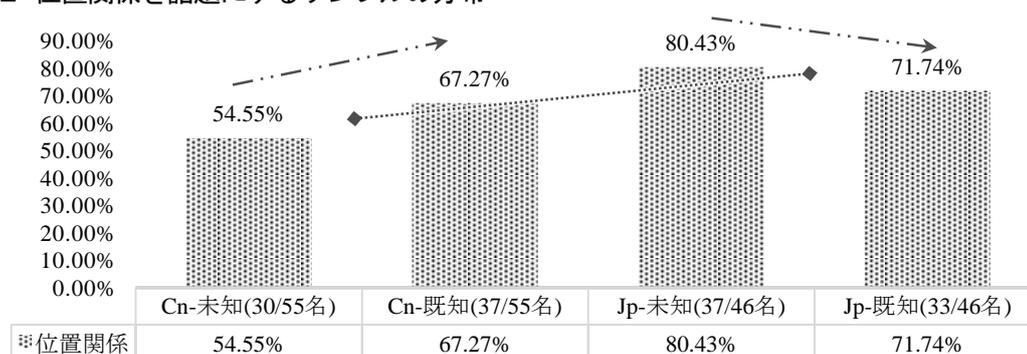
分類話題	位置関係	様子や状態	知識
Cn-未知(55)	54.55%	10.91%	43.64%
Cn-既知(55)	67.27%	21.82%	47.27%
Jp-未知(46)	80.43%	26.09%	26.09%
Jp-既知(46)	71.74%	41.30%	41.30%

※一部重複あり

2.1 位置関係を話題にする場合

調査の結果、表 1 のように中国語話者の 60.91%、日本語話者の 76.09% (平均値は「◆」で標記) が客体の位置関係を紹介してくれた。両者の間に際立った違いがみられる。その上、未知な場合に比べて、既知の場合では、中国語はサンプルが 1 割ほど増えているようだが、日本語の方はサンプルがやや減っているように見える (変化の傾向は「→」で示す)。

表 2 位置関係を話題にするサンプルの分布



◇サンプルのズレの発生率はカイ二乗検定を用いて検定した結果、

日中両グループ	$X^2=8.13$	DF=3	$0.01<P<0.05$	有意差あり
中国語のサンプル	$X^2=1.87$	DF=1	$P>0.05$	有意差なし
日本語のサンプル	$X^2=0.96$	DF=1	$P>0.05$	有意差なし

表 2 で分かるように、全体的に言えば、中国語話者より日本語話者が位置関係を問題にする意欲が高い。ただし、中国語話者は馴染みのある場面の位置関係に関心を示すのに対して、日本語話者は初めての場面の空間配置をより詳しく報告している。

(1) a. 首先，在我们面前的是一个药店。药店右边有一个邮局。再接着往下走是派出所。(Cn-未知:4)

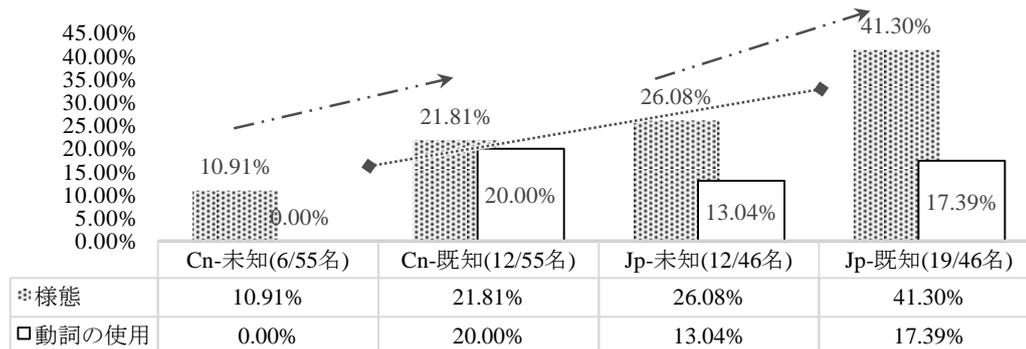
b. 人民英雄纪念碑在中间，它的前面是天安门，左边是人民大会堂，右边是中国历史博物馆。(Cn-已知:12)

また、洪(2021)で指摘したように、中国語話者には「異質空間」と「均質空間」との 2 種類の心理空間をもって状況を把握しているが、日本語話者では「異質空間」を理解するには困難なようである。例(1)では発話者が自己を分裂して、「事態内視点→事態外視点」或いは「事態外視点→事態内視点」のように視点を数回移動した。

2.2 様子や状態を話題にする場合

客体の様子や状態に話題を設定した用例を次の表 3 のように整理する。全体的には、標本数が右肩上がりに増加し、未知より既知のほうが、中国語より日本語のほうが、様子や状態に重点を置く割合が高い。

表3 様態を話題にするサンプルの分布



◇サンプルのズレの発生率はカイ二乗検定を用いて検定した結果、

日中両グループ $X^2=12.87$ $DF=3$ $P<0.01$ 有意差あり

中国語のサンプル $X^2=2.39$ $DF=1$ $P>0.05$ 有意差なし

日本語のサンプル $X^2=2.38$ $DF=1$ $P>0.05$ 有意差なし

サンプルには、例(2)のように、客体の様子を紹介する場合（連体修飾語など）もあれば、例(3)のように、客体が建てられている有り様（例えば「聳え立つ」）、もしくは配列の仕方（例えば「一列になって」）を説明する場合もある。建物の様子を紹介する場合、日本語では連体修飾語がよく用いられるのに対して、中国語では存在文やコピュラ文を用いて描写している。客体の有り様や配列の仕方（つまり状態）を説明するには、基本的に述語動詞によって場面を描写する。

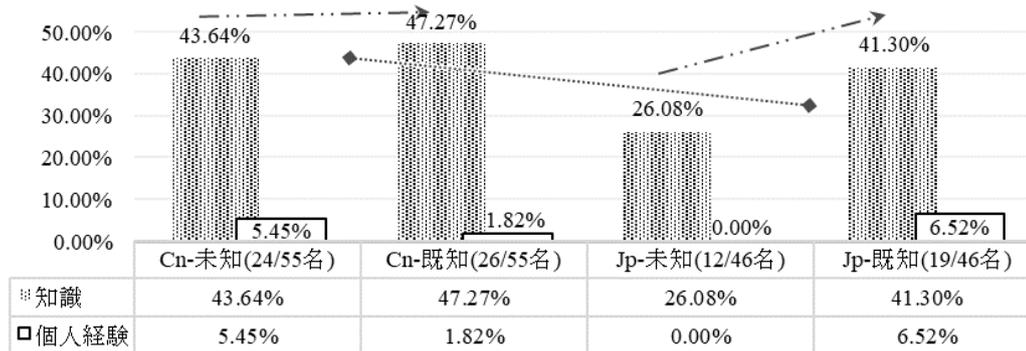
- (2) a. くすりって書いてある建物と 〒っていうマークの ゆうびん局で、そのとなりに KOBAN。(未知:Jp-45)
- b. 药店有四个透明的玻璃窗，上面有“+”的符号，而邮局前面有个黑色的信箱，派出所有个粘帖报纸的栏。(未知:Cn-19)
- c. 一番大きいタワーが スカイツリーで、2番目に大きいタワーが 東京タワーです。大きな提灯が見えるのが 雷門です。(既知:Jp-31)
- d. 图片正下方的一个 正方形 是人民英雄纪念碑、后方是天安门广场，可以看升旗，左右两边是人民大会堂和中国历史博物馆。天安门的后方是故宫。(既知:Cn-37)
- (3) a. 左から 順に、薬局、郵便局、交番と店が 並んでいる。(未知:Jp-17)
- b. 一番手前があるのが雷門で、その後方に東京ドームシティがあります。建物の中で 一番大きいスカイツリーが そびえたち、その近くに東京タワーがあります。(既知:Jp-5)
- c. 人民英雄纪念碑 坐落在 天安门广场，正前方的是人民大会堂。大会堂的旁边，是闻名的中国历史博物馆。(既知: Cn-16)

以上で分かるように、中国語では、話者が未知な客体の状態には無関心のようなのである（述語動詞を用いて未知な場面を描写する用例がない）。一方、既知な客体では、例(2d)の様子“一个正方形”を除いて、いずれも客体の状態を（述語動詞を用いて）描写している。したがって、中国語話者（今回のサンプル）が未知な場面に置かれると、客体の様子に関心を示すが、既知な場面では客体の有り様（客体自体の状態）や、空間配置の仕方（全体の状態）に関心を払うということが言えよう。日本語では、様子と状態とを区別して扱うことなく（例 3b）、どんな場面に置かれても、日本語話者が知る限りの情報を提供し、事細かに説明しているようである。

2.3 知識を話題にする場合

提示された画像には写されていない発話者自らの知識に焦点を当てて報告するサンプルを次の表4のようにまとめる。どのような場面に置かれても、4割の中国人被験者が自我を強く主張したが、反対に、日本語話者の場合は、客体に親しみを感じた分だけ、より詳しく紹介しているように見える。

表4 知識を話題にするサンプルの分布



◇ズレの発生率はカイ二乗検定を用いて検定した結果、
 日中両グループ $X^2=4.32$ $DF=3$ $P>0.05$ 有意差なし
 中国語のサンプル $X^2=1$ $DF=1$ $P=1$ 有意差なし
 日本語のサンプル $X^2=2.38$ $DF=1$ $P>0.05$ 有意差なし

また、本稿は話者の持つ知識（縞模様の部分）を共通認識と個人的な経験（白い部分）とに分けて、内訳及び標本数を表5のように整理する。

表5 知識の種類及び分布

	未知な場面	既知な場面
中国語	共通認識：100% 用途:24例 先験的な経験 仮想:3例 (計24例)	共通認識：100% 用途・評価:14例 リアルな位置:12例 先験的な経験 仮想:1例 (計26例)
日本語	共通認識：100% 用途12例 事後的な経験 なし (計12例)	共通認識：100% 用途・評価:13例 リアルな位置:13例 事後的な経験 東京見学の収穫:3例 (計19例)

※一部重複あり

被験者は基本的に客体の用途(例 4a,b)や現実世界にある位置 (例 4c の「東京、浅草」,4d の“东西南北”) など共通認識について説明している。

- (4) a.くすりが売っている店。届け物を届ける場所。けいさつに用がある人が行く所。(未知:Jp-2)
- b.药店:拿药的地方 邮局:寄信的地方 派出所:触犯轻微法规的人处理事情的地方(未知:Cn-23)
- c.東京の風景が広がっています。私から見て、一番手前に浅草の雷門があり、その後ろに東京ドームシティ、さらに奥には東京タワーがあり、一番後ろにスカイツリーが見えます。(既知:Jp-31)
- d.人民英雄纪念碑位于天安门广场中心，正北方向为天安门城楼。人民大会堂与国家博物馆均位于天安门广场，东西相对称。(既知:Cn-37)

被験者が個人的な経験を伝える場合、日本語話者は例(5a)のように東京見学の収穫を語って、旅行のアドバイスを提供してくれた。中国語話者は生活経験による推測(例 5b)や、仮想した空間を見学しているように(例 8b,c)画面を紹介している。即ち、日本語話者が事後的な経験を報告するのに対して、中国語話者は先験的な経験を好んで報告する。

- (5) a.雷門とスカイツリーは浅草にあります。スカイツリーは日本で一番高い建物です。そこから見える景色は美しいです。東京ドームシティは私は行ったことがないので分かりませんが、遊ぶところです。東京タワーは六本木あたりにあって、夜に行くときすごくきれいです。1日でこの4ヶ所を回ることができますよ。(既知:Jp-10)
- b.如果您需要买药，药店就在邮局旁边。如果您需要寄信，中间那个便是邮局。如果您需要警察帮助，请前往派出所。(未知:Cn-12)
- c.这里是中国引以为傲的天安门广场，承载着沉重的历史重量，看，那边是人民英雄纪念碑、中国历史博物馆，那边是人民大会堂，各位想了解更多关于他们的历史，可以回去

查阅相关资料。(既知:Cn-6)

ほかにも、場面を描写する場合、中国語話者は視線を追うように常に一定の順番に沿って、客体を限られた角度から説明を展開していく。日本語話者の場合では、知悉している客体であれば、例 5a のように様々な角度から(「浅草にあり」はリアルな位置であり、「日本で一番高い」は評価であり、「遊ぶところです」は用途であり、「1日でこの4ヶ所を回ることができ」は経験である)、思いつく順で(「雷門→スカイツリー→東京ドームシティ→東京タワー」の順番)場面を描写する事も可能である。

2.4 他に気づいた点

以上述べたこと以外に、気づいたことが2点ほどある。

第一に、未知な場面に比べて既知な場面に含まれている情報量が多いはずである。しかし、次の表 2'、表 4' を見て分かるように、位置関係を報告する日本語話者の割合と個人的な経験を紹介する中国語話者の割合が減っていることが判明した。日本語話者にとっては既に把握した位置情報が蛇足になるか、中国語話者は釈迦に説法のようなことを控えているかと思われる。

表 2' 位置関係を話題にするサンプルの分布

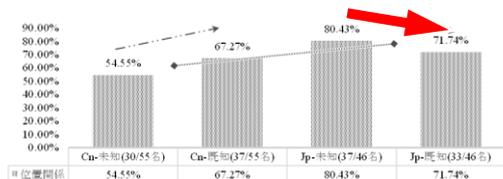
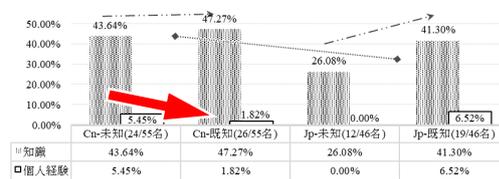


表 4' 知識を話題にするサンプルの分布



第二に、中国語話者は基本的に出来事を一つの側面(話題)から描写しているが、既知な場合では幾つかの側面から出来事を報告するケースもある。日本語話者は(位置関係を除いて)、なるべく多くの角度から出来事を紹介しているように見える。

表 1' 話題の設定

分類話題	位置関係	様子や状態	知識	合計
Cn-未知(55)	54.55%	10.91%	43.64%	109.10%
Cn-既知(55)	67.27% ↑	21.82% ↑	47.27% ↑	136.36%
Jp-未知(46)	80.43%	26.09%	26.09%	132.61%
Jp-既知(46)	71.74% ↓	41.30% ↑	41.30% ↑	154.34%

表 6 幾つかの話題を取り上げた場合

	未知な場面	既知な場面
中国語	位置関係+様子や状態+知識: 1例	位置関係+様子や状態+知識: 6例
	位置関係+様子や状態: 0例	位置関係+様子や状態: 5例
	位置関係+知識: 4例	位置関係+知識: 7例
	様子や状態+知識: 4例 (計9例)	様子や状態+知識: 0例 (計18例)
日本語	位置関係+様子や状態+知識: 0例	位置関係+様子や状態+知識: 3例
	位置関係+様子や状態: 9例	位置関係+様子や状態: 12例
	位置関係+知識: 2例	位置関係+知識: 5例
	様子や状態+知識: 0例 (計11例)	様子や状態+知識: 6例 (計26例)

3. 陳述の仕方

サンプルに用いられる動詞（述語、連体修飾語、介詞を含めて）を整理・統計して、以下の表6を作成した。

表7 動詞の分布

	動詞（介詞）	未知な場面	既知な場面
中国語	存在句（場所+客体）	14 例 25.45%	7 例 12.72%↗
	在字句（客体+場所）	6 例 10.9%	19 例 34.54%↘
	是字句（判断句）	34 例 61.81%	50 例 90.9%↗
	※介詞“在”+主語	3 例 5.45%	10 例 18.18%↗
	※数量詞“一个”+客語	5 例 9.09%	9 例 16.36%↗
	“看/見”類（発話者の観察）	3 例 5.45%	4 例 7.27%↗
“走”類（発話者の移動）	4 例 7.2%	2 例 3.64%↘	
“屹立/坐落”類（建物の状態）	0 例	7 例 12.72%↗	
“环绕/排列”類（空間の状態）	0 例	2 例 3.64%↗ (55 例のうち)	
日本語	存在文（場所+対象）	25 例 54.34%	31 例 67.39%↗
	所在文（対象+場所）	0 例	3 例 6.52%↗
	コピュラ文	20 例 43.47%	21 例 45.65%↗
	「見える」など（発話者の観察）	8 例 17.39%	22 例 47.82%↗
	「通る/回る」など（発話者の移動）	0 例	5 例 10.86%↗
	「聳え立ち」など（建物の状態）	1 例 2.17%	7 例 15.21%↗
「並ぶ」など（空間の状態）	10 例 21.73% (46 例のうち)	3 例 6.52%↘ (46 例のうち)	

※一部重複あり

3.1 存在表現

存在文、所在文、コピュラ文など存在表現が用いられる場合、中国語では、未知な場合に存在文、既知な場合に“在字句”という使い分けがある。その上に、どのような場面に置かれてもコピュラ文で強く自分を主張し、共通認識と個人的な経験とを区別せず、「見る」ことが「知る」として直接的に結びつくように見える。また、文頭の介詞“在”及び客語を修飾する数量詞“一个”などが既知な場合に用いられる割合が高い。

日本語では、存在文を大きく限量的存在文と空間的存在文（「所在文」とに分けて、前者は、発話者の立場から下す世界についての判断の一種であるのに対し、後者は物理的な空間、時間を対象が占有することを表す出来事の一つである（金水敏 2006）。未知な場面にしろ、既知な場面にしろ、日本語話者が基本的に空間的存在文を用いて、場面を描写している。それから、中国語話者に比べて、日本語話者が主張や判断を避けているように、コピュラ文の使用を抑えているように見える。

3.2 主体に関する説明

観察の主体、いわば発話者の「観察」及び「移動」といった二つの側面から場面を描写することが可能である。未知か既知かは関係なく、中国語話者は場合によって、自己を画像の中に位置づけ、そこから観察するか、或いはそこを通るかのように場面を描写することができる。それと違って、日本語話者は実際に見たこと、実際に体験したこと、事実に基づくことを語る。

3.3 客体に関する説明

表3も示すように、観察の客体の様子や状態を描写する意欲が、日本語話者より、中国語話者の方が低いように見える。しかも、既知な客体に限って、その状態を問題にするようである。

日本語話者は、未知な客体の全体像（空間の状態）を、既知な客体の細部にわたって（建物の状態）紹介してくれた。

以上